



# 桑名石取祭の石と生きもの

## 第1章 | 桑名石取祭

### 石取祭とは

石取祭は、三重県桑名市でおこなわれる祭事で、員弁川（町屋川）の川原で拾った石（栗石と呼ばれている拳大の石）を奉納する祭りです。祭りでは、深夜に各町内の40台近い山車（祭車）の鉦鼓（しょうこ：鉦と太鼓）が一斉に打ち鳴らされる「叩き出し」や祭車の練り歩きなどがあり、「日本一やかましいお祭り」ともいわれています。

祭りは、6月の第一日曜日に桑名宗社（春日神社）でおこなわれる占い（御神籤占式〔みくじうらないしき〕）で、その年の渡祭〔とさい〕の順番を決めることから始まります。7月には員弁川で石を拾う川原祓式〔かわらばらいしき〕がおこなわれます。

鉦鼓の練習を経て、祭りの約2週間前には、石取祭ばやしのコンクールが開催されます。そして、8月第一日曜日「本楽〔ほんがく〕」と前日の土曜日「試楽〔しがく〕」の祭りを迎えます。

試楽は、土曜日の午前0時に春日神社の神楽太鼓が鳴らされるのを合図に、「叩き出し」がおこなわれ、祭りの中で最も幻想的で緊迫した雰囲気にも包まれる瞬間を迎えます。朝には、採石された栗石が奉納され、夜は、各町内での祭車の練り歩きが夜11時過ぎまでおこなわれます。

翌日の本楽の見どころは、春日神社での渡祭（祭車の練り歩き・奉納）です。神社の門の前で整列した祭車は、花車（一番始めの祭車）から順に次から次へと各組の祭車の奉納がおこなわれます。その際、御神前で鉦鼓を打ち鳴らしたり、祭車の祓いをおこないます。渡祭を終えた祭車は組単位で自町へ帰り、祭りは終了します。祭り期間中は、葉ショウガと枝豆を片手に酒を酌み交わし、人々は祭りと交流を楽しんでいます。



写真：祭車の鉦鼓が叩き出しの様子

写真出典：<https://www.kankomie.or.jp/event/35039>

出典：桑名石取祭総合調査報告書(桑名市教育委員会)

出典：桑名石取祭保存会(<https://isidori.jp/index.html>)

### 川原祓式と石取祭のうた

川原祓式は、奉納するための栗石を員弁川の川原で拾う行事です。各町内で奉納するため、石を500個程拾い、これらは祭りの終了後に拝殿前に敷かれます。以前は員弁川に架かる国道1号線の橋の上手で川原祓式をおこなっていましたが、納める栗石が採れなくなったため、現在は上流へ上がった場所で石取の儀礼をおこなっています。

採石の意味には、社地修理といった諸説あります。かつての石取祭り自体は採石が主であり、祭礼化はされておらず、民間の行事であったといわれています。石取祭で曳かれる祭車は、その拾った石を運んでいた荷車が原型だともいわれています。

神社の参拝時にうたわれる祭り唄である「おかつつあん」では、石取り場である員弁川の様子も表現されています。「町屋川原のなでしこの花〜♪」などの歌詞があり、ナデシコやカニといった生き物も歌詞に登場します。



写真：川原祓式で栗石を納めた献石儀

写真撮影：古澤礼太

出典：桑名石取祭総合調査報告書(桑名市教育委員会)

出典：日本の祭り(ダイドードリンコスペシャル)

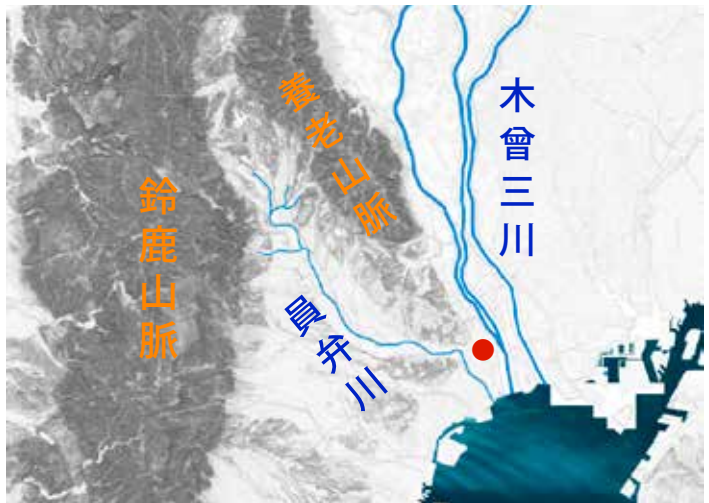
取材：桑名石取祭保存会

### 員弁川と桑名

桑名石取祭の舞台は、南北に伸びた伊勢平野の北部に当たる、桑名市南部の伊勢湾沿岸地域です。鈴鹿山脈北部の御池岳を源流とする員弁川と岐阜県の冠山を源流とする揖斐川に挟まれた場所にあります。桑名の低地は、河川の水が大地を削って出た砂や礫が、沿岸に堆積して形作られました。また、河口付近は人為的につくられた干拓地であり、田畑となっています。

石取祭で採石される栗石は、花崗岩が風化した礫です。その花崗岩は、鈴鹿山脈の竜ヶ岳から釈迦ヶ岳にかけて分布している鈴鹿花崗岩類です。員弁川は、その約60%が山地を流れており、川には山から削り取られた砂や礫が多く流れます。栗石も鈴鹿山脈から流れてきた花崗岩の礫です。また、豊富な礫を運ぶ員弁川沿いでは、川が運んだ堆積物の礫を対象に商業目的の砂利採取もおこなわれています。

員弁川の下流部を町屋川と呼んでいます。かつての町屋川の流路は枝分かれしたり、他の河川と合流したりと桑名の下流域を分断していました。1601年(慶長6年)に桑名藩の本多忠勝は、「慶長の町割り」という城下町づくりをおこない、町屋川は現在の流路に変更したといわれています。



写真：桑名周辺の地形(赤丸が石取祭がおこなわれる地点)  
写真出典：国土地理院(傾斜量図を一部加工)

出典：桑名地域の地質(吉田史郎/栗本史雄/宮村学)

出典：二級河川 員弁川水系河川整備計画(三重県)

### 桑名の植物

日本に生息しているナデシコは、カワラナデシコ(河原撫子)といいます。河原の名の通り、日当たりの良く乾いた草地や河原を好み生育しており、7～10月にかけて花を咲かせます。本州～九州、中国、台湾等に分布していますが、埼玉、東京、鹿児島などでは、絶滅危惧に指定されています。ナデシコ属は、世界に約300種存在しています。日本に海外の品種が入りはじめると、日本原産のナデシコと区別するため、カワラナデシコをヤマトナデシコとも呼ぶようになりました。

万葉集には、植物が詠み込まれた歌が1700余ありますが、ナデシコは26首読まれています。また、秋の七草のひとつとしても知られており、昔から身近な植物であったことが感じられます。

石取祭の行事食には、葉ショウガの酢漬けと茹でた枝豆があります。生姜は奈良時代から栽培されていたという記録があります。根ショウガ、新ショウガ、葉ショウガなどがあり、殺菌効果や食欲増進の役割を持っています。大豆は弥生時代初期に中国から日本に伝わりました。大豆が熟す前の状態で収穫されたものを枝豆といいます。枝付きのまま茹でて食べていたことが名の由来ですが、桑名のスーパーや八百屋では、祭りの時期になると多くの枝付き枝豆が店頭並びます。これらは祭りの期間中、家人だけでなく来客にも振舞われており、なくてはならない存在です。



写真：  
カワラナデシコ

写真出典：  
[https://www.env.go.jp/park/aso/photo/a01/b02/a01\\_b02\\_p002.html](https://www.env.go.jp/park/aso/photo/a01/b02/a01_b02_p002.html)

出典：サントリーフラワーズ(<https://www.suntory.co.jp/flower/asuhana/76.html>)

出典：三河の植物観察(<https://mikawanoyasou.org/data/kawaranadesiko.htm>)

出典：環境省([https://ikilog.biodic.go.jp/LifeSearch/detail/?life\\_darwincore\\_id=11236573](https://ikilog.biodic.go.jp/LifeSearch/detail/?life_darwincore_id=11236573))

出典：万葉集にみる秋の七草の生息立地(七海絵里香/大澤哲志/勝野武彦)

出典：農林水産省([https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2102/spe1\\_04.html](https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2102/spe1_04.html))

出典：桑名石取祭総合調査報告書(桑名市教育委員会)

変わりゆく桑名と自然

桑名は、東海地方で最大規模の古墳時代(600年頃)の貝塚である中縄遺跡があり、室町時代には、「十楽の津」という仏語で極楽浄土の十種の喜びの意味を持つ港町として栄えました。また、江戸から京都までを繋ぐ東海道五十三次の42番目の宿場であり、熱田と桑名の間にある東海道で唯一の海路の「七里の渡し」(7里：約27km)でも有名です。このように桑名は古代から近代に至るまで土地と水、自然と人によって育まれてきました。



←  
1960年代  
→  
2009年



写真：河原の砂利部分(白色)が減少  
 写真出典：国土地理院(当時の画像と比較するため白黒に加工)  
 出典：桑名市(<https://www.city.kuwana.lg.jp/brand/bunka/rekishibunkai/24-11157-234-406.html>)  
 出典：三重県(<https://www.pref.mie.lg.jp/common/content/001005325.pdf>)

しかし、現在では、員弁川の下流でカワラナデシコを見ることはできません。また、祭りで奉納される石が今までの川原では採れなくなるという変化が起きています。これらの現象には、様々な要因が考えられます。員弁川は、かつて大雨が降ると大規模な土石流が発生していました。現在、員弁川では砂防堰堤〔さぼうえんてい〕の整備や河川堆積土砂の撤去といった治水に関するプロジェクトが進められ、浸水被害の低減が図られています。栗石が採れなくなった原因として、土砂の流出が減少したことによって栗石が下流まで流れにくくなったことや、河原の草地の増加による石取り場の減少が考えられます。また、土石流や洪水の低減により、河原に溜まった土壌に根付く低木や成長のはやい植物が増え、日当たり良く乾いた環境を好むカワラナデシコが淘汰され、生育しづらくなった可能性もあります。生活・文化・環境は常に変化していくものですが、失われていくものにも目を向けてみましょう。

考えてみよう！

- Q 1 . ワークショップでは、石取祭の唄の歌詞に登場するカワラナデシコについて学びました。全国的にカワラナデシコが減少した原因として、どのような事が考えられますか？  
A. \_\_\_\_\_
- Q 2 . 桑名石取祭では、栗石が今までの川原で拾うことができなくなりました。どのような変化が考えられますか？  
A. \_\_\_\_\_
- Q 3 . 本ワークショップでは、桑名石取祭を通して人と自然の関わりを学びました。SDGs(持続可能な開発目標)の17ゴールとのつながりをいくつか見つけることができましたか？



キーワード:

カワラナデシコ、枝豆、葉ショウガ、鈴鹿山脈、員弁川(町屋川)、揖斐川、養老山脈、土石流、堆積土砂、川原、花崗岩、治水、砂防堰堤、慶長の町割り、採石、貝塚、港町、東海道五十三次、七里の渡し

### 「やかましいだけではない!石取祭の魅力」

桑名石取祭がおこなわれる桑名宗社から程近い立教まちづくり拠点施設を会場に、ワークショップを開催しました。このワークショップでは、鈴鹿山脈から伊勢湾までをつなぐ員弁川(町屋川)と揖斐川にはさまれた桑名の地形などを学びながら、桑名の歴史とサステナビリティについて学びました。

ワークショップは趣旨説明の後、石取祭保存会の宮川龍男氏による歓迎の言葉があり、同じく石取祭保存会の伊藤嘉浩氏による講演「やかましいだけではない!石取祭の魅力」がありました。講演では、石取祭の面白さや苦労、感動などの長年経験してきたからこそ知っている臨場感あるお話しでした。伊藤氏は、試楽から殆ど眠らずに講演をして頂きましたが、本楽までの間、不眠不休も石取祭の醍醐味ということでした。

講演後には、石取祭の資料や祭車が展示してある桑名市石取会館へ見学に行きました。会館では、実際に祭車に備え付けられている鉦を叩く事ができ、参加者はその音の大きさに驚いていました。



### 「石取祭から考える桑名の自然」

石取会館の見学の後、会場近くの公園にて「栗石探し」と「植物採取」をおこないました。公園内に隠された栗石を探しつつ、押し葉標本にする植物を採取しました。子どもたちは、一生懸命に栗石を探し集めました。

会場に移動後、中部ESD 拠点事務局長の古澤礼太氏による「石取祭から考える桑名の自然」の講演がありました。講演では、SDGs についての解説をおこない、員弁川の変化がもたらしたと思われる、カワラナデシコと栗石の影響について、持続可能性に関するお話がありました。

講演でカワラナデシコについて学んだ後、講演で採取した草花とナデシコの押し葉作成をおこないました。また、押し葉の作業ともに、まち歩きの際に食べる枝豆の枝からの取り外し作業をおこないました。



### まち歩きと祭り見物

会場の周囲から祭車の鉦鼓が聞こえ始めた頃、まち歩きをおこないました。まち歩きでは、葉生姜の酢漬けとワークショップで調理した茹でた枝豆を食べながら、桑名宗社や七里の渡し跡等を見学しました。

日が沈み、まちを練り歩く祭車の提灯が映える中、七里の渡し跡にて、ワークショップは終了しました。ワークショップ終了後は、祭りで賑わう商店街の一角にある食事処で、参加者同士との懇親会をおこなったり、祭りの見学をおこなう等、思い思いの時間が過ごされました。

